

しゃべれども しゃべれども

2007(平成19)年12月9日鑑賞(千日前国際シネマ)

★★★



監督＝平山秀幸／原作＝佐藤多佳子『しゃべれども しゃべれども』（新潮文庫刊）／出演＝国分太一／香里奈／森永悠希／松重豊／八千草薫／伊東四朗／占部房子（アスミック・エース配給／2007年日本映画／109分）

第2章

映像が先か、活字が先か

……いつまでもうだつの上がない「二つ目」の落語家が主人公。そして、そこに集まる話し方に劣等感をもつ若い女性と小学生と元プロ野球選手たち。今ドキの「負け組」のオンパレードだが、さてその再チャレンジは……？ 江戸情緒も十分、じっくりと伝わってくるやさしさと温かさも十分だが、若干インパクト不足……？

主人公は「二つ目」！

二つ目と言ってもお化けのことではない。これは上方落語に対する江戸落語の世界における呼び方。いわば相撲の世界における関取に匹敵する(?)「真打ち」に対して、真打ち予備軍が「二つ目」で、その下の落語家の卵は「前座」と呼ばれている。

最近、落語家でも古典ばかりやる人は少なく、いわゆる新作落語をやる人がほとんどだが、この映画の主人公である今昔亭三つ葉(外山達也)(国分太一)は古典しかやらない。それは古典が好きだから。また、今ドキは落語家だって普段はスーツ姿が多いが、三つ葉は普段から着物姿オンリー。それも着物が好きだから、という変わりモノ。

しかし残念ながら、師匠の今昔亭小三文(伊東四朗)に言わせると、「お前の落語には何の工夫もない」らしい。これでは、一体いつになったら真打ちになれるのやら……？

3人の弟子たちのキャラは……？

この映画は、面白いキャラの出し合いで勝負しているような映画……？ そもそも、

主人公の三つ葉自体がかなりの変わりモノだが、三つ葉の「話し方教室」に通ってくる3人のキャラがそれ以上に変わっているから、主人公がまともに見えてくるほど……？

第1の弟子十河五月（香里奈）は、美人だがとにかく無愛想で口下手なため、それを直そうと通ってきた女性。第2は、大阪弁でよくしゃべるのだが、あまり勝気すぎるため東京の小学校でガキ大将たちから疎外されている少年村林優（森永悠希）。そして第3は、身体はデカいが小心者で、野球解説者なのに歯切れが悪いモタモタしたしゃべりを何とか直したいと願っている元プロ野球選手の湯河原太一（松重豊）。

教育レベルが低下し、コミュニケーション能力が低下した今、五月や湯河原ほどではないにしても、要点を踏まえたきちんとしたしゃべりのできない若者がうじゃうじゃいる。そんな連中にいきなり落語を教えても、それをマスターするのはムリで、まずは国語の教科書の朗読から始めなければ、と私は思っている。しかし、それでは映画にはならないため、三つ葉の指導下3人の落語の特訓（？）が始まったが……。

本職がダメな奴は、恋でもダメ……

三つ葉は今、祖母の春子（八千草薫）の家で一緒に住んでいるから、炊事・洗濯はすべて祖母任せ。したがって、特に嫁さんが欲しいとは思っていない様子。親と同居していなくても、今ドキの若い男性は小器用で食事も洗濯も掃除もこなせるから、そもそも結婚したいという欲求をもたないタイプが多いのが現代の世相……？

そんな三つ葉だが、ストーリー展開を見ていると、茶道を教えている春子の教室に通ってくる実川郁子（占部房子）が好きなようで、郁子の前に出ると三つ葉はいつもドギマギ。そのうえ、初デートで料理が苦手という郁子の弁当を食ったものだから大変なことに……。こんな姿を見ていると、三つ葉はどうしようもない今ドキのバカ者に思えてしまう。つまり、本職がダメな奴は、恋の道もダメだということだ。

そんな風に苦々しく思いながら（？）ストーリー展開を見ていたのだが、映画の後半は意外にも……？

本来五月は、すげえ美人……？

カルチャー教室での師匠小三文の講義を途中退席した五月に対して三つ葉が苦言を言ったのが、三つ葉と五月の最初の出会い。そして、「あの人本気でしゃべってない

じゃない」というのが五月の言い分だと知った三つ葉が、二つ目だけが集まる早朝寄せに五月を招待した(?)のが2度目の出会い……?

「すげえ美人がいる」と若手たちが騒いでいる中、三つ葉が高座に上がると、何と前方の真ん中の席に五月が。このように、本来五月はすげえ美人なのだが、この映画を観ている限り、一貫して無愛想でイヤな女。私ならいくら美人でもこんな女は願い下げだが、変わりモノの三つ葉はいつのまにか……?

『火焰太鼓』の好きな人は是非

三つ葉は小三文の一門会での出し物を、何と師匠の十八番である『火焰太鼓』と決めた。これは、郁子の腐った弁当を食べた三つ葉が病院で点滴を受けている間に下した決断だが、さてそこにはどんな思いが……?

師匠はそれを「フーン」と聞いていただけだったが、前日の深酒のせいで危うく寝過ごしそうになった三つ葉が、向かい酒を吞んで挑んだ一門会での『火焰太鼓』の出来は……? 『火焰太鼓』の好きな人は是非、国分太一がナマで演ずる『火焰太鼓』の出来を味わってもらいたいもの。だってそれは、師匠も「お前、酒が入っている方がいいんじゃないの……」と感心したくらいだから……。

『まんじゅうこわい』の好きな人も、是非

他方、三つ葉の「話し方教室」で教えている演題は、私もよく知っている『まんじゅうこわい』。その練習風景を見ていると、やはり記憶力が良く、おしゃべりの優が一番進歩が早そう。したがって、話し方教室の「発表会」での出し物は、『まんじゅうこわい』に決まり、その上方版を優が、江戸版を五月がやることに決定。優はガキ大将たちを招待し、「ガキ大将を笑わせたら俺の勝ち」と賭けていたが、さてその勝敗は……?

他方、時間になってもなかなか現れないのが五月。やっぱり自信喪失で敵前逃亡かと思っていると、春子に励まされて登場した五月は、演題の変更を告げたからビックリ。そのうえ『『火焰太鼓』をやります』ときたから、三つ葉はなおさらビックリ。セリフ丸覚えで、一本調子の五月の『火焰太鼓』は面白くも何ともない出来だが、長いストーリーを全部覚えただけでも立派なもの。ところで、五月はなぜ突然演題の変更を……? そしてまた、なぜ『火焰太鼓』覚えたの……?

■ 隅田川の水上市バスに乗らなくちゃ……

「水都・大阪」を目指して、大阪はここ数年あの手この手の施策を打ち出している。現在活躍中の水陸両用バスもその1つだが、去る12月17日に関西経済同友会が打ち出したのが「水都・大阪」の50年先を見越した近未来ビジョン。それによると、大阪市内の中心部を「ロの字」形に流れる川や堀を「水の路」として生かし、御堂筋に水路を通すなどのアイデアが。その実現には50～100億円のカネが必要と試算されているが、それくらいの費用でそんな大改造ができるのなら安いもの。是非夢物語に終わらず、現実的な施策に高めてもらいたいものだ。

そんな視点から、この江戸落語の映画を観てみると、東京では何とんでも隅田川。大阪で大川を行き来する水上市バスが運行しているように、隅田川でも水上市バスが運行しているが、その大きな違いは船の高さ。大阪のそれは橋で頭を打たないよう極力低く抑えられているが、東京のそれは2階のデッキに上がって風景を眺めることができるもの。映画前半は浅草界隈の情緒いっぱいの風景がタップリと登場して楽しいが、ラストはこの隅田川を進む水上市バスのシーンに注目。2階のデッキの上に立つのは、もちろん三つ葉と五月の2人。さあ、この映画はそんな舞台設定の中、どんなクライマックスで終わるのだろうか……？

■ 『寝ずの番』ほどではない……？

落語をネタにした映画や落語家が出演する映画がすべて面白いわけではないが、『寝ずの番』（06年）を観れば、その手の映画に傑作が多いことはたしか。2007年5月27日に公開された『しゃべれども しゃべれども』については、ネット情報を見るとベタ誉めの評論が多く、「5月公開作品のなかでもダントツのおススメ映画！！！」というものもある。

たしかに、この映画は面白くて心温まるもので良くできた映画。しかし、あえて言えば『寝ずの番』のような、アツと驚くインパクトとスピード感に欠けるのが弱点。私はそう思ったが……？

2007(平成19)年12月22日記